

★生産性向上
★休暇のとりやすい
風土の実現

教育訓練

など各種研修を全従業員（パ
員含む）を対象に実施。誰が
のかわかも、スキル表を見れば一
とに、誰が『教えられる』『任
取りをすれば出来る』『補助
出来ない』のか明確に工場内



助け合える職場

『見える化』を徹底させているため、滞っ
ている工程があれば、他の作業者にもわかる。
作業手順書・各種マニュアルを見て、手伝う
ことができる。エルダー社員（高齢者雇用
社員）や事務職員がサポートに入ることも。



DDKで
「助け合う職場」が実現

DDKされているラインは、完全に「見
える化」させているため、滞っている工
程があれば、他のグループにもひと目で
わかる。作業手順書・各種マニュアルが
明記されているので、滞っている工程を
後工程のグループの作業者が手伝える。
また、休暇などで作業者が足りない工程
があれば、比較的容易に代わりの作業者

次に行うのが、「仕事の内容整理・整
流化」（DDK活動の実施）だが、各工
程における作業内容を見直し、必要な作
業・無駄な作業を分けるなど問題点を整
理し、無駄な作業を行わない、あるいは
無駄な作業を減らすために必要なことは
何かなどの改善点を考え、無駄を排除し
て正しい仕事の流れをつくる。

改善作業は現場の少人数グループにて
行うが、特筆すべきは現場の「課長権限」

でこうした改善作業が進められること。
全てが課長の判断で「DDKする・し
ない」「DDKするにあたって必要な
物品の購入」「具体的な作業の見える化」
が進められるのだ。もちろん現場の少
人数のメンバーだけで、DDKが実現
しないものもあり、その場合は全社的
なプロジェクトチームが結成され、D
DK活動が行われる。その難易度によ
り「大変」「中変」「小変」に分け、「小

変」「中変」に関しては現場にて改善し、
「大変」レベルの改善は、部長・経営陣
の判断を仰ぎプロジェクトチームが結成
され改善が進められていく。

具体的なDDKは、誰でもできるよう
に、作業手順書・各種マニュアルを整備
し、工場内の誰でもが見えるところに表
示するといったことが基本となる。DD
K工程が認定されるとDDK工程看板が
吊り下げられ、DDK度を量る尺度とし
て星印を使用。DDK工程看板の星印が
1つであれば3ヶ月程度の教育で作
業ができる、星印が3つであれば1時間
程度の教育で作業ができる工程となり、
初心者でも作業手順書・マニュアルを見
れば作業をすることが可能ということだ。